こころのやみを

心行の巻

目次

西方極楽の説……一
須摩提と涅槃……三
本願……六
十八願玄談序論……一六
同　玄談……二一
佛土論……二三
心行論……三一
安心起行の形式……三二
起行用心と功果内容……三四
功果内容……三七
宗祖の道詠……四〇
道案内……四一
道中実験……四二
導師を師南とする理由……四四
宗祖入信と証入……四五
法と行との選択……四七

西方極楽の説

阿彌陀經に、過十萬億佛土、有世界、名曰極樂、其土有佛、號阿彌陀、今現在說法舍利弗、彼土何故、名爲極樂、共國衆生、無有衆苦、但受諸樂、故名極樂と。

西方極樂の說は、阿彌陀經のみにあらず、其餘の經に散在す。

天國と云ひ、西方と云ひ、宗教の萬行終局の歸趣する處、一方所一局部に局限せらるゝ如きものに非らず。畢竟如虛空、廣大無邊際なるは無論なれども、西方の說に就き、古來種々の解釋を試みる者あり。或は密教の闇號表示的に、東方を發心と爲し、西方を畢竟となす。故に大菩提心を起して究極する處、諸佛の涅槃界を西方とすと。是說は表示的に西方を解す。

或は諸佛の境界、本、絕對無有方所、本無方所に方所を立て、西方と曰ふ。雙手の音聲なきに雙手の音を聞けと云ふと同じく、絕對無方所の境界を體得せしむる公案なりと、是禪の公案的に西方を解す。

また或は一方、一心、一歸、一思惟、要する處、自己の歸依する、また心を一境に止めて散亂なからしむる方便なりとの解あり。

また或は一說に日の將さに沈み逝かんとする夕陽の光は、其光景實に美の天國を偲ばしむ。縱令此土は薄闇と爲りゆくにも拘らず、彼の落日の許に、常盤の光明界を偲ばしむ。直觀的に最も西方落日の下に我が故鄉ありとの感想は、實に理屈ではなくして感想上入日の輝く方に常盤の光輝ある故鄉を偲ばるゝことである。されば宋の慈雲法師も落日の下に我故鄉在りと。是我等が永遠の涅槃界を瞻望するに、日中に太陽の眞上に在りし時に太陽の輝く下に永恒の光明界を觀ずるのも、斯土の闇澹として冥々窈々たるに至るも、紫雲靉靆として麗目輝きて天鼓其赫々たる、（　）其に東方の斯土が闇澹たるに反し彼美天國は益々光輝を添ふ。斯れ人界と佛界との對照を直覺的に觀ずることを得。是は淨土を瞻望する直覺的の感想上落日の下に常住の光明界を立つの說なり。

然く種々に說くべけれども若し宗教發達の歷史より見れば、實には西方須摩提の說は、印度に於て遠きペーダの太古に於て、日の入る西の方に須摩提なる永恒に樂を享受すべき樂邦あり、我らが祖先の靈は今彼樂土に於て、七寶樹の花は常盤の春を匂はせ、八功德池の水は甘露の味を漲らす。我等も頓て祖先の靈と共に彼須摩提に到りて永恒樂を受くとの說は、釋尊已前數千年來、印度人が未來の天國諸の上善人の俱に會する處と信じ來りし傳說に外ならず。宗教は此人類の歷史と同じく、精神的生活の人文的歷史にして、幼稚なる狀態より漸深に進化したるなり。されば縱令歷史の原始的に遡つて幼稚なる宗教なるも、進化の人文發達したる人に由て進化す。

須摩提と涅槃

須摩提と涅槃とは一體の異名に外ならず。須摩提とは印度古來の傳說にして、太來

の天國永恒不死の樂邦と信じ來りしや久し。されば印度人の傳來的信仰に、須摩提と云はゞ宇宙最幸福の美天國と彼等は信ぜり。其樂土は西方の落日の下に在りと謂ひたりき。後釋尊は曾て生死の闇宅を厭ひ、常住の安穩所を求めんが爲めに、王宮を出て入山學道年を經て、竟に無明の眠生死の夢醒めて、正覺を生じたる時に、大涅槃常住平和なる境界現前す。

此涅槃界は、一切の煩惱染汚の滅したる處、常住の平和清淨安穩にして、自然の妙樂ありて大自在の境界、一切諸佛諸の煩惱の滅したる人の安住する處なり。釋尊が無明の夢醒て、初めて發見したる無上の樂土至高最德で、至幸福の靈境は即ち涅槃界である。釋尊の發見したる最幸の境界と、印度人の傳說の最幸福の須摩提とは、同體異名なり。涅槃界本諸佛正覺者の精神的に安住する處なれば、絕對的の靈界にして、已に分齊を離れ方所を超絕す。

然るに、釋尊は、絕對無方所の涅槃の靈界にすべての人類を歸趣せしめんが爲めに古來の傳說の須摩提と、自己發見の涅槃界とを結びつけて、常住安穩の涅槃界を名づくるに須摩提と號け、宗教的信仰を以て、一切諸佛最正覺の中心本尊たる無量光如來に一心に歸命信順して、光明に攝取同化せらるゝ時は、無明闇黑の衆生も轉じて正覺の光と爲り、(　　)諸佛正覺を成じ、彼無量壽國に入りぬれば、自から生死を超へたる無量壽の涅槃界に安住することを得。諸佛絕對の靈界は即ち是西方の極樂なれば、衆生有相の見に住して、一ら西方安樂土を覓むるに、彼に入て見れば即ち無法所の涅槃界。また涅槃の莊嚴處々に滿てり等の說甚だ多し。能く宗教的眞理を悟達する人は涅槃と須摩提とは同體異名なることを明にす。然るに頑迷の輩實に能く斯眞理を會せず。極樂は實に全く西方十萬億土の彼に在りて、涅槃界は方所を離れたる諸佛の境界なりと。凡夫差別の見解を破らずして、自ら諸佛平等の境界に會入す。まことに善巧の方便なり。

本　願

集曰

彌陀如來餘行をもて往生の本願としたまはず唯念佛をもて往生の本願と爲したまへる文。

無量壽經上云、設我得佛。十方衆生。至心信樂。欲ㇾ生ニ我國一。乃至十念。若不ㇾ生者。不ㇾ取ニ正覺一。

この弘願、何時、何意、何等のためにかおこしたもふ。過去久遠無量劫に錠光如來乃至、佛います。世自在王如來と名づく。時に國王あり。佛の說法を聞いて心よろこびをいだき、尋ち無上の道意を發し、國を棄て王位を捨て、行じて沙門となり、號して法藏といふ。高才勇哲にして、世と超異せり。世自在王如來の所に詣づ。こゝにおいて佛即ち爲に、廣く二百一十億の諸佛刹土の、天人の善惡、國土の麁妙を說き、其の心願に應じて、悉く現して之を與へたまふ。時に彼の比丘佛の所說の嚴淨國土を聞いて、皆悉く觀見して無上殊勝の願を超發す。其心寂靜にして志所著なし。一切世間及ぶものなし。五劫を具足して莊嚴佛國淸淨の行を思惟し攝取す。此中に二百一十億の淨土の中に人天の惡を（たとへば人の相の好と醜とあるは惡。人の色の黃と白と黑等は惡、五神通のそなはらざるは惡。乃至もろ〳〵の身口意に、善妙の功德のそなはらざるは惡なり。）捨て人天の善をとり、國土の醜を捨て國土の好を取る。

（若しこの娑婆世界の如きは、一少分として取るべきものなし。衆生惡業をおこして三惡道に墮するの怖あり。所依の土甚狹迫にして穢なり。形體を論ずれば臭穢のつゝむところ生老病苦及び諸の苦惱ありて、常に身に逼る。貪瞋諸の憂悲恒に心を惱ます。いかほど微密にさぐるとも一として取るべきものなし。悉く捨つべきものゝみなり。）

あらゆる所見の國土の中より、悉く善妙なるものを撰擇して、四十八願をもて淨土を莊嚴す。人天惡業を起すべき緣なければ三惡道に墮する憂なし。身に三十二相具は

りて端正殊妙なり。六通三明を得るが故に意のごとく自在なり。佛の佗受用（　）所化の衆生に象らしめて（　）功德より國土の嚴淨なること、みな四十八願をもて成立せるところなり。衆生一たび此淨土に往生しぬれば、必ず不退にして佛果を證す。一一の誓願は之れ衆生をして同じく佛道を得せしめんがためなり。中に就て第十八念佛往生の願最も衆生のために必要なり。

一一の願の終りに若ししからずば我も正覺を取らじとの玉へり。然るに阿彌陀佛已に成佛したまひて、於今十劫。成佛の誓既に以て成就せり。第十八願の意。

至心（とは至誠心なり、全くたのむこゝろにあらずばすくふによしなし）

信樂（深く信ずるなり。謂く、この惡業深重の凡夫、自ら苦海を脱することを能はざれども、阿彌陀佛慈悲のちかひをもて我をすくふ。この佛意をそのまゝにくみとりて、よろこびねがふて信じてうたがはざるなり。）

欲生我國（廻向發願心なり。阿彌陀ほとけをたのむこと、ひとへに淨土にうまれたきまゝ、ひとへにふりむけてすがるこゝろなり）

乃至十念せんに若し生せずんば正覺をとらじと。

乃至十念とは多より少に向ふの言なり。上盡一形より下至一聲なり。問。第十八願何故ぞ佗の諸行を捨て、念佛の一行を選取して、往生の本願とするや。答曰。聖意難測。今試みに二義をもて之を解せん。一者勝劣の義。二者難易の義。初に勝劣とは、念佛は是勝なり。餘行は是劣なり。其所以は、名號は是萬德の歸する所なり。然れば則ち彌陀一佛所有、四智、三身、十力、四無畏、等、一切內證功德、相好、光明、說法、利生、等、一切外用功德。皆悉攝在阿彌陀佛名號中、故名號功德最爲勝也。餘行不然。各守一隅是以爲劣也。次に、難易義とは、念佛は修し易し、諸行は修し難し。念佛は易が故に一切に通ず。諸行は難が故に諸機に通せず。然れば則ち、一切衆生をして平等に往生せしめんがために、難を捨て易を取て、本願と爲るか。若し夫れ造像起塔をもて本願と爲さば則ち貧窮困乏の類は定て往生の望みを絶ん。然るに富貴のもの

のは少く貧賤の者は甚だ多し。若智惠高才をもて本願とせば則愚鈍下智の者は定て往生の望を絶ん。然るに智惠あるものは少く愚痴なるものは多し。又多聞と少聞と持戒とも例して爾り。故に彌陀如來法藏比丘の昔し、平等の慈悲に催されて、普く一切を攝せむがために、佗の諸行を本願とし玉はずして稱名の一行をもて其本願と爲玉へり。

念佛は勝 ｛名體不離なるが故に、阿彌陀と云名は即ち阿彌陀佛の體を詮するなり。然れば則ちこの名號の中には自ら阿彌陀佛にそなはらせ玉ふ萬德悉く離れざるなり。

諸行は劣——一隅の故に

○

觀無量壽經に云く、無量壽佛に八萬四千の相あり、一一の相に八萬四千の隨形好あり。一一の好に八萬四千の光明あり、一一の光明は遍く十方世界を照して念佛の衆生を攝取して捨て玉はずと云ふ。しかれば彌陀如來相好圓滿のよそほひをあらはし、盡十方無碍の光普く無邊の世界を照せども、其標準とするところは唯念佛の衆生を攝受するにあり。我ら何ぞ之を仰いで量らざる。如來妙色身、世間無與等、無比不思議の尊容も深廣無涯底の智願海も、佛心の大慈悲も、ひとへに我を攝益せんが爲なり。善導大師觀經の疏に曰く。問曰、備に衆行を修し但能廻向すれば皆往生を得、何を以てか佛光普く照すに唯念佛の者のみを攝するは何意ありや。答て曰く、此に三義あり、一に親緣を明す。衆生行を起して口常に佛を稱すれば佛即ち之を聞きたまふ。身常に佛を禮敬すれば佛即ち之を見たまふ。心常に佛を念ずれば佛即ち之を知りたまふ。衆生佛を憶念すれば佛も亦衆生を憶念したまふ。彼此の三業相離れず。故に親緣と名づく。二に近緣を明す。衆生佛を見んと願ずれば、佛即念に應じて目前に現在す。故に近緣と名づく。三に增上緣を明す。衆生稱念すれば即ち多劫の罪を除く。命終らんと

欲するとき、佛聖衆と與に自ら來つて迎接したもふ。諸邪業繫能く礙る者なし。故に增上緣と名づく也。自餘衆行も是善と名づくと雖、若念佛に比すれば全く比校にあらざるなり。(諸邪業繫とは衆生妄想顚倒の中に於て諸の邪見を起して業を爲す、其の業因に繫縛されて自ら離脫すること能はず。自力の修行ならば二乘及び諸の菩薩無漏聖道を以て漸にこの業縛を脫す。凡夫自力をもつて之を脫すること能はざるも佛の攝受及び迎接にあづかるときは、業繫も能く礙ることなしと。)また觀念法門云、又前の如く身相光明一一偏く十方世界を照す。但阿彌陀佛を專念する衆生のみ有て、彼佛の心光常に是人を照して攝護して捨て玉はずと。

佛光普照。唯攝念佛者三義

親　緣〔佛の三業と衆生の三業と相離れず。其緣最もしたし、毫釐も間隙なし。

近　緣〔衆生の念に應じて目前にあらはる、甚だ近し。

增上緣〔自分の力なくとも佛の光益によつて佗のために破られずして增上せらる。

○

觀無量壽經云。若有衆生。願生彼國者。發三種心。即便往生。何等爲三。一者至誠心。二者深心。三者回向發願心。具三心者。必生彼國。

至誠心とは眞實心なり。即ち一切衆生の身口意業に修する所の解行必ず須らく眞實心の中に爲すべし。當に知るべし、念佛する者、三界六道苦惡の事を厭ひ、眞實心中に身業に彼の阿彌陀佛を禮敬し、眞實心中に彼の阿彌陀佛及び依正二報を思想觀察憶念して目前に現するが如くすべし。阿彌陀佛心光常に照し玉うて行者の所念實の如に知り玉ふ。若し我れ身惡を造らば大となく小となく悉く知見したもふ。口に惡をなすも意に惡念をなすも一一皆佛は知り玉ふ。今我たすけたまへ阿彌陀佛とおもひ、口に稱ふ聲、一聲ごとにしりたもふ。然るに虛假心の者、貪邪奸詐中より、外に賢善の相をあらはして、念佛するも、內に眞實に阿彌陀佛たすけたまへの心なきときは、佛たすけたまはず。其の餘の世間の凡夫人にその相をしめし、其聲を聞かしめて何の所得

かある。眞實心に彌陀大慈父の至心本願より常照我のかたじけなさをおもへば、忘る間さへなかるべし。而して念々の歸命は佛一一に遐念し給ふ。

眞實二種
- 一 自利眞實
  - 眞實心中制捨自他之諸惡及穢國等。常想同一切菩薩。
  - 我如是。
  - 眞實心中勤修自佗凡聖善
- 二 利佗眞實
  - 口業
    - 讚嘆彼佛
    - 厭三界苦
  - 身業
    - 眞實心中禮敬供養彼佛等
    - 厭捨此生死苦界
  - 意業
    - 思想憶念阿彌陀佛等。
    - 輕賤此生死三界

深心二
- 信機
  - 自身は現に是罪惡生死の凡夫曠劫より流轉して出離の緣あることなしと。
  - 彼阿彌陀佛四十八願を以て衆生を攝受したまふ。無疑無慮、乘
- 信法
  - 彼願力、定得往生
  - 釋迦經說
  - 諸佛證誠

回向發願心

十八願心理的研究玄談序論

通じて宗教意義を論ず

通じて宗教は神人合一、大小二我の調和にありと。又云ふ神人不離の關係する處にありと。又神の救濟を被るにありと。

甲は形式主義にて宇宙全體の大心靈が即神にて、人は其一小分部心である。一小分子が全大と本來合一すべき性能存するを知らず、自我を認むるを迷とす。大我と合一する親密の關係を爲すを宗教とす。

乙は神は太陽の如く靈界の大靈日にして、衆生心は無明罪惡態である。靈的太陽に攝取同化せられ、永遠の救濟を蒙るを宗教とす。

甲乙其趣を異にするも所歸は同一。何にしても宗教は主體と客體との關係にあり。客體は宇宙全一の表現にして、主體は一分の衆生心。

絶對無規定と相待規定せらるゝ衆生との別あり。衆生は因緣に規定せらる。生滅變易。客體は絶對無規、圓滿眞實、相待規定せられたる生死を超えて絶對永遠に歸入するには客體の神の恩寵に依らざる可らず。是に宗教あり。

所歸、所求、去行を決定した意識を安心と云ふ。

客體—所歸の尊體

宗教の客體通じて神と云ふ。今最高等なる宗教的神、如來又アミダと爲す。

彌陀に三あり。

一、實體としての彌陀。二、宗義學客體としての彌陀。三、心行所歸の彌陀。

談義に他力の實體と化用。

一　實體としての彌陀

談義に、他力實體。凡聖淨二門共以二眞如實相一爲二其體一。故前聖道門所レ明、無塵法界凡聖齊圓之理、恒沙功德寂用湛然之性、即是他力實體。五智之中、佛智者、即指二

此理一也。

實體名稱。宇宙の本體を哲學語に實體又眞如、法性、第一義諦等種々異名あり。是宇宙の實體を表象するの異稱に外ならず。楞嚴には如來藏妙眞如性と名く。若宗教（　）法身如來藏性と云ふ。密教には金胎不二の毘盧舍那と號す。同體の異名。今は彌陀の法身と爲す。

法　身——金剛

如來藏——胎藏

二　宗義學形而上客體としての彌陀

實體論には宇宙全體通じて如來の實體と爲す。宗教の要求する神即全體の中に、根本と、中心と、終局と無かる可らず。此中心主宰を得ざれば宗致立つべからず。

獨　尊

宗教は絶對的獨一の神尊の存在を信じ之に歸命信賴す。

獨尊の存在。人身に自我、國家の帝王、天體の太陽の如く、宇宙全體唯一獨尊。宗教は宇宙大我と小我との合一にあり。若此中心を得ざれば全體得難し。國と國との戰爭にも中央政府を的として中心を得れば全部歸す。佛教汎神教にも一切諸佛の根本的中心的獨尊を立つ。經に無量壽成神光明最尊第一。

若し此根本中心大威神者に歸命信順せざれば諸佛の位置に至る能はず。

談義に、淨土中極樂爲レ最。諸佛中彌陀爲レ本。彼佛是淨佛國土主、諸佛慈悲之體。

十八通に、阿彌陀實には無量と無量名、體、義、用、智、光、定、通、形、色、相、貌、身、壽所有一切事成就、故曰無量佛。柏松杉槇阿彌陀名體を離るゝことなし。

一切彌陀の相貌、五千餘卷、是阿彌陀、三世諸佛皆阿彌陀。

楞伽に、十方佛刹中衆生菩薩等、所有法報應身及變化身皆無量壽極樂界中出。

天臺。彌陀を念ずれば一切諸佛を念ず。故阿彌陀を以て法門の主とす。

（密教大日等は斯尊の異稱に外ならず。）

右は形而上宇宙唯一獨尊彌陀に有ることを明す。

心行門には斯佛を心行の本尊として歸命信賴する時は必ず一切諸佛に歸す。彌陀諸佛の主なればなり。斯尊の外に實は尊なきなり。若無量の諸佛の名あるは彌陀の異號に過ぎず。之に歸命して眞實の宗教心は成立す。宗教は自己の頭腦に常住の本尊存在して之に一切時處を撰ばず、己を歸命して奉仕するは安心を得たりと爲す。

玄談

初、宗教定義二

一、宇宙全一なる神と自己との合一（大我小我調和）

二、宇宙中心眞髓なる神と自己の中心

大靈の至純靈相の神の光明に、大心靈界の太陽の光明に攝取靈化せらるゝ信仰。

二、宗教發達史の三階

自然教

超然教

圓具教

三、高等なる宗教三流義

一、一神教

二、汎神教

三、超在一神的汎神教（一切衆生佛性と共に統一者を立つ）

四、宗教安心三要領（信仰を立つる三要件）

一、所歸の客體（歸命本尊彌陀如來）

二、所求の依止處（畢竟依屬の淨佛國土）

三、去行（現在の位置を去て眞如の都に行く心行）

一、佛身論。二、佛土論。三、安心起行論。

佛身論（之に三）

一、實體として彌陀

名——哲學的宗教的

體質—
- 唯物、唯心、唯理
- 絶對大心靈
  - 離言—超時、超空、一切超絶
  - 依言—
    - 法身（父）金
    - 如來藏（母）胎

二、宗義學の獨尊として彌陀。獨尊—
- 統攝
- 歸趣

三、心行本尊として彌陀。
- 撰擇本願の主。
- 歷史的宗教の根據として。

佛土論

絶對的依正佛土三、(佛土觀)—衆生相待業感の世界依正を超て絶對大涅槃ー眞實佛土大涅槃界ー相待生死を超絶し永恒常住の依處

極樂
- 約ノ佛— 大涅槃界ー畢竟如虛廣大無邊、第一義妙境界
- 約ノ機— 西方十萬億土。
  - 一、一ノ心、一ノ方、一ノ境、定ニ安ノ心處ニ。
  - 二、感情土—日夕邊。
  - 三、往昔從來傳說。(古來傳說を依憑するは實地宗敎上に缺くべからず。)
  - 四、神秘的。

極樂
- 佛智所照——無爲泥洹
- 凡夫所見——十萬億土

十八通(上九)云、淨土者第一義諦妙境界相次於無爲泥洹之道。

談義云、極樂是無爲泥洹之界諸佛法王之家。

同曰、諸佛法無相泥洹爲三所期ニ。

涅槃と須摩提

須摩提、譯して極樂。又妙樂淸泰等とす。一切世界中最幸福之地なり。スマティ日夕の方に永遠幸福の地あり、大慈(善)王之所領、彼處に淸閑なる樹蔭に八功德池の甘露の水を汲て我等が祖先は居る、我等も彼處に到り祖先と幸福を共にせんと。

釋尊、無上道意を發し生死解脫の道を求め六年修行の結果無上道を覺りて無明を破る。生死を超えて大涅槃を證し給ふ、涅槃は一切有爲を超絶したる、時間空間を越えたる、絶對的永恒生命に、一切の相無く諸の作爲を離れたる處、(自存)には一切妙色莊嚴(常)四德莊嚴の處。釋尊は淨佛國土を說くに三種に說く。證者の爲には自己所照の

まゝに淨土は去此不遠と說き、凡夫の爲には過於西方の彼岸と。甲は自己所見に本づき、乙は古來の傳說に依る。須摩提と涅槃と同體異名。

佛土の異名

如來の在す所を淨土と爲。神國に例すべき種々の異名存するは、本來同一の涅槃界絶對の大心靈界、無量功德の莊嚴する處、實に不可思議無量の德を具備す。其見る處の方面に隨て相を異にす。隨つて名稱も種々に表明す。

一、淨土。淸淨國土、十八圓淨等、是感覺的に五妙境界、美天國とも名づく。如來成所作智の所現。

二、極樂。感情的に。佛土は常樂我淨四德莊嚴、妙樂圓滿の故に。

三、常寂光土。理智の所照、又如來大智慧の所現、故に理智不二、寂而照。

四、自性淸淨涅槃。自性淸淨、本煩惱生死なく、本自法然、大涅槃。之に迷て生死とす。之を發見するを佛と爲す。是禪家の所見佛土。生死涅槃如昨夢。衆生と佛とは本來一體。

心行所求の佛土

極樂無爲泥洹之界、諸佛法王之家、超方域、絶邊際。時間空間相待に規定せらるゝ迷の凡夫衆生を誘ふに指方立相終局目的の歸處を標し、西方十萬億とす。

是法藏比丘酬因感果の報土、四十八願莊嚴淨土。

一々誓願爲衆生、是爲物身の佛身佛土なれば。

他力實體は本絶對眞如盡虛空、絶對的大心靈體。

此絶對の眞如中に、佛は四智圓照して已に無明の眠醒めたる光明界淨法界の方面に在り。衆生は如來大光明中に在りながら、無明に翳せられて八識の現境を實感し、現に天地日月星辰山河大地悉く是八識の所現。

凡夫八識の所感。

淨土はミダ、

淨土と穢土

宇宙實體は即如來の法體、宇宙は本來絶對的大靈態即ち眞如である。如來絶對本體の中に自ら二現相と爲る。光明と闇黑の二方面。甲は如來四智の所現相。乙は凡夫八識の所感である。甲を淨法界と云ひ、乙を染法界。又淨土と穢土等の種々名を以て區別せらる。甲は日中の如く、乙は夜の如く、宇宙に二體あるに非す。甲は報佛の所感乙は凡夫の業感。自己業感のあらや現境を捨て、彌陀淨業の四智の方面に轉ずる時は凡夫の闇黑より眼明て如來四智の淨界が現前す。

十八通廿一悟は從本自迷是常他故從穢土他國還歸淨土本國。

心理は三世諸佛、法界衆生、無二無別、但彌陀曠劫行道悟、我等心理成清淨依果即第一義諦妙境界相淨土。

我ら今修淨業超入淨土、合會彌陀清淨依果、即入一法句、極樂入一法句云さながら我ら本有悟なり。

三不成

一、質

執淨穢不二失俗諦恒沙法無量諸佛願行淨土穢土出世利生是(瞻)

二、異質

執淨穢隔別永異處背眞淨平等一理諸佛平等一法身

三、無質

共に非土無淨土下無穢土、六凡四聖因果(　)撥違諸佛說法常依二諦不壞假名而說實相　盲漢

當宗、是業力所隔、諸佛所構、雖在當處、非如一質、(四智所見と八識所感)十萬億

刹非ゝ如二異質一(智と識との所感は異なれども實體本質は同一なり)

雖非一非異、不ゝ會二墮無質執一、直生當處、極樂而不壞十萬億程、十萬億程雖遙、生當生極樂、淨名方丈、豈是毘耶外王賓半日非二南浮內一、若是毘耶外何方丈室內、若是南浮內ならば爭七世の孫に値はん、況諸佛願行、同常別古今法爾なるをや、何況彌陀教門相無相、見生無生、佛(意)所構出、搜玄即冥也。

如來不思議の法

經——十萬億

論——如虛空無邊

淨土有邊無邊經論相違

淨土の體と相

去行論

去行形而上論——心行論

去行の形而上論とは、如來と衆生との關係。衆生本法身より生て還た法身に還らざるはなき　去の形而上は如去の義にて、衆生本眞如より出で迷て六道の他鄉に彷徨ふ本の眞如に去るを終局目的とす。

如來の歸趣即攝取の光に歸順するの義。

大原談義云、他力化用と謂は、密意の上の教門也、亦四智の所成也、極樂不ゝ遠、構二十萬億刹之西一、彌陀在二己心一現二一座華臺形一、不思議智不可稱智等者、指二此善巧方便一也、誠以眞如界內、絶二生佛假名一、平等性中、無二自他差別一、眞如非ゝ自非ゝ他、而包二自他性一、故鎭薰習二自他一、令ゝ會入二平等性性海一、應知、言二自力他力一者、此即强弱義也、薰力弱時、則雖二冥薰密益一、而行人不二自勵一者、不ゝ得二道果一、故云二自力一也、

薫力强時、諸佛成二外護知識一、施二增上緣一、故云二他力也一、雖レ有二强弱一、共是眞如力也、故眞如界佛爲二平等性衆生一可二開示一一心法界理一之處、垢障覆深凡夫以二自力一、自己淨體難二顯照一故諸佛無極慈悲、哀二衆生迷倒一、示現二法藏發心一、發起二超世弘願一、以二易行易修之口稱一、令レ得二頓悟頓入之往生。他力之實體爰易レ顯。弘願化用忽易レ成、曇鸞法師約二實相爲物之二義一、釋二如實修行相一、

淨土法は諸佛無極の慈悲を以て無塵法界の上の他力弘願の化用也、然他力大道廣弘五乘齊通入、於二圓々極々無相無念果成之上一、起二無方難思之大用一

安心起行の形式

宗祖に親しく道を傳承せられたる私淑せる門下に於て、心行の形式相同じからざるは、宗祖の如き大偉人の宗教心も、見る方面に依て門下の見解も隨て同一ならず。或は一念義を主張するあり。又多念義を宗祖の正流なりと見るあり。故に門下の聖光善慧幸西覺明等の宗祖の（　）を傳ふるに心の方に本づき、又は行の方に則り、種々の方面から祖意を傳へんとし、流派が多岐に分れて、各自己の見る所を基點として、之を正統と信じて流義を立つ。今は鎮西上人が宗祖に私淑し、八ヶ年間に互りて正しく祖意を傳承し、鎮西に歸りて流義を立て、祖意を（　）、安心起行を組織的に祖述せり。簡にして義を盡せるは授手印なり。

祖自ら組織的に著作せられしを見ず。然れども門下に對して示されたる法語に於て心行の様を示され玉ふ。

授手印に末代念佛者、知淨土一宗之義、修淨土一宗之行、首尾次第條々、

一、行事五正行正助二業

二、念佛行者必可具足三心事

三、具足三心者必可修五念門事

四、行三心五念者必可具四修法事

五、三種行儀事

釋曰我法然上人言、拜二見善導御釋一、源空目、三心五念四修皆俱見二南無阿彌陀佛一也。

起行用心と功果內容

宗祖の法語に示す處、心行の樣を示して、起行の用心には深く沙汰し玉はず。然れども自行の熱烈なる、寒夜尙ほ全身汗すと。宗祖は實修を身業を以て行相を示す。故に起行の用心としては、念佛申すに全く別の樣なし、たゞ申せば極樂へ生ると知て心を至して申せば參るなり。

宗祖心行の要義は聖光上人禀承して記す。

宗要（十八四十九丁）　般舟經自說往生事、意云、欲生我國用念佛三昧故、得生阿彌陀佛國常念如是佛身、々有三十二相悉具足、光明徹照端正無比文、答善導深意有此文見給、難者淺不見給、心深御覽、其故佛名體云法門あり名者南無阿彌陀佛也、體者三十二相體也、佛體欲見者佛名聞佛名行念體可見也、例如呼人名見人形、故七日別時念佛者、七日間口佛名奉呼、意佛體奉見思也、是念名念體也。今般舟三昧經念佛善導得意給、念體彌陀本願非、念名彌陀本願思取、經前後文見、我念者我名念得意給也、念名本願也、阿彌陀經執持名號文、今口稱名號念佛行者所期見佛三昧以所期、共故口稱念佛成就不成就以三昧發得、現身念佛成就者見佛、依之別時念佛云者南無阿彌陀佛云稱名是行也、彌陀本願也、佛三十二相相現給事行者志念處所期、行者現身三昧發得證

取爲、七日別時念佛始、不淨止め散亂をやめて淸淨心住、入定方規以心思所無餘念見佛也。口無餘言南無阿彌陀佛

般舟と壽經

宗要(四十九)別時念佛事、別時念佛何機、答是見佛三昧爲期、而尋常遲見故、疾見奉爲、別時念佛用也、疾佛奉見、是見佛三昧頓機爲說之。尋常機漸機、別時念佛頓機、乃至尋常念佛漸機見佛也、無想時佛奉見、尋常行者念佛居程、無想心成時、佛見給也。有想時不奉見佛、九十餘の勿、水靜時月浮、風吹起念、佛を見んと欲するも得ず般若經には妄念と記せり。

宗要五十八(九十六)念佛三昧發得事、これこそ念佛者の大切なる事よ、是をよく習ふ可き事にて候。一切の行は所期を思ひつめてこそ行ずれ、人每に何とも思はで念佛中す(は惡き也。念佛三昧發得)せんこそ所期なれ。

七十六(一一六)念佛行者所期是見佛三昧也、故見佛爲本意、故約所期進三昧と云。

効果內容　起行用心は因、功果內容は果

念佛者三心具足して一に彌陀佛を念ずる時念佛爲因、彌陀三念加力被故、三昧發得す。

宗要七十三、念佛五種增上緣、導師言若得定心三昧及口稱三昧者、心眼即開見彼淨土一切莊嚴。

一者以二大誓願力一加念故得レ見レ佛

二者以二三昧定力一加念故得レ見レ佛

三者以二本功德力一加念故得レ見レ佛

宗祖念佛三昧功果內容圓熟せる高僧傳中其比を見ず

心行所期內容靈的內容充實せしむるに在り。例せば學業所期は知能啓發德器成就に在る如く、靈的內容成就せしむるにあり。農夫稼穡に勉むる目的は良米を獲得するに

あり。往生の業事成辨功果內容充實すると同一である。

內容は彌陀靈德を以て自己中心眞髓なる心情を彌陀心光と融化する處にあり。例へば金庫を列置するも內に金財の內容なからんか金庫將た何の價値かある。心行の意旨彌陀靈力を被て自己を靈的充實するにあり、彌陀の靈に充たしめ大慈悲に實らしむるにあり。

宗祖の內容豐富なるを倣ふべし。

法語類——心行の形式

宗祖心行の要を明したるは撰擇集なり。範を一に善導に則る。尙宗祖心行の形式は悉く二祖に傳承せり。

御存生中一切の道俗を開導するに一ら本願念佛を勸め、安心起行の要領を示して、功果を臨終見佛往生淨土に期せしむ。

現在に功果の內容を試驗して彌陀の妙味を味しむる方面は未だ盛に行はるゝに至らぬ。故に道俗を誘引するに示す處の法語類、和語燈錄及び御傳等に散在す。所化を導くに功果の內容本質を試驗して益々向上せしめ靈的妙味を感ぜしめて宗風を益々宣揚するに至らしむるは、祖師の流義を傳ふる後輩の任務なり。例せば禪門の如きは摩大師西來して不文の心印を傳へて已來、代々の傑物自己の靈的實驗を以て世に傳へんと欲して、心靈の妙味を味はするに四十八則乃至千七百の公案等を出すに至れり。是祖意を傳播し一切を成佛せしむるの手段なり。猶太敎は律法的に化石せり、キリスト敎は道法的に復活せるもの是保羅が儀文に事ふるに非ず靈に事ふるに儀文は死し靈は活かせばなり。

キリスト曰く、心の淸き者は福なり其人は神を見ることを得べければなり。

宗祖の道詠

宗祖は求道者の入道の道程中の實驗の靈的現象及び受感の妙味を吐露して他を誘引するの手段に用ひ給はざりし。然れども自己靈的内容の豐富なる實に未曾有なりと覩はる。

開宗者は何に偉大なるも傳道の機關は後嗣者に業を貽す。例せば蒸氣電氣の器械的應用としても發明者より後に應用の道は次第に完成するに至るなり。

宗祖靈的内證の實に甚深なる、高僧傳中に未だ其比を見ず。内證を秘して語り給はず。故に法語等には其神秘の靈妙を明し給はず。然れども孔子曰く詩三百一言覆之思無邪にて、言ふ意は詩を（ゝたものが三百篇もあるけれども、詩と云ふ者は何なる内容で在るかと尋ぬるあれば、意を以て一言で言盡せる、曰く思ひ邪なしと。全體歌は理窟を詮するものでなく、情を有のまゝに洩出づるにある。全く嬉敷感じたから嬉敷情が歌と現はれ全く戀しいから戀しさを詞に洩出たのが詩である。宗祖が一心專念の信深く念々不捨の業の强ければ、佛願の增上緣が不斷に宗祖の心情に加はり、冷暖自ら知る靈妙の實感、實に不可思議心情靈に滿され慈悲胸憶に充ち、沈腐袋裡に滿つれば搖ぐ時は必覆都として芳を發す。宗祖は道詠に自ら靈感の内容を洩し給へり。故に祖師の内證の靈妙を窺ふ實に管見の微なるも道詠につきて聊か其内容を測り奉る。

若し宗教を普に心行の形式のみに止まり、内容の中心眞髓なからんか、宗教の生命何の處にか存在せん。

永遠に靈活の彌陀の靈的生命が永へに十方一切處に徧在するも、若し至心信樂の心なき時は其活力を現はすに由なし。日光に植物を長養せしむる能力が徧在するも種子を播下せざれば其功果もなきに等し。

宗祖は後昆の爲に靈的生命の範を示し玉へり。

心行形式は淨土に達する道案内

三心具足して一に彌陀を念ずる時は順次に往生するは是一ら祖師の教ふ所、安心起

行心相を帝都に通達するの道に例へば、名古屋より發して東海道を經歷して帝都に達する道路は本より已に成て居る。其道なるものは未だ發足せざるも已に中途に到りたるも道は本來同一である。心行の法則を知るは道案内記を持てるが如くである。

功果の内容は道中實驗

已に正しく發心して心行具足し一ら念佛を修する時は、全く旅裝して其途に就けるが如く、若し已に出發する時は念々に歩々に心行の過程に什麼か經驗することあるべし。例へば名古屋より東京に上る道中に、或は熱田の宮、又は東海名區の興津淸見寺三保の松原と云ふ如く、心靈界最高處なる彌陀の靈都に通達する光明生活の道中に焉んぞ名所好景勝地なららん。然して其已に道程益々高く進めば進むに隨て彌々光明大道の靈境、吉野山櫻爛漫として麗しきを呈し、三保の松原今も尙天つ乙女が風に搏て舞遊ぶ。若已に光明の途に就く時は生涯是光明大道なり。是帝都に到達する大道。

斯光明道中は觀音勢至と俱に華麗裝飾せらる花電車に乘り、導祖宗祖と俱に彌陀の願船に乘り順風に帆をかけて薩婆若海を航す、恰も好し。

若し唯心行の形式のみを說き、全く光明大道に就き道中の靈驗の在る宗教にあらざれば、甚だ價値のなき宗教團なり。

頓教の無門の門無關の關たる禪家にも心行の過程として四十八則千七百の公案、さながら團員の爲に大道の名所勝跡を驗しむ爲なり。又純他力の眞宗が信者を指導するに領解證入の試驗甚だ嚴にして容易に往生の合格を許さず。

學業及技藝の階級と宗教過程の階級。

學業にしても過程の階級あり。學業成績の云何を試驗し、之に依て實力を養ひ知能を啓發し實力を養ひ益々進むに隨て興味をも感じ已が勞を忘れて學ぶ。

茶道花道音樂の如きも、其道業に入れば階級あり。初傳中傳等と稱し矢張其秘傳する處には其道の玄奧を秘して居る。若し祖風を傳承せる宗匠たる吾淨教の流に五重等

の傳なきに非ざるも、唯形式のみに止まりて、閑事業たる茶花道等の業に心力を拂ふだにも及ばざるは、一大事因緣の事業たる宗教の得道の爲に何ぞや。是宗祖の流派を傳播する宗匠が唯方便の形式に泥んで宗教の生命たる眞髓たる活ける方面を忘る。

靈的衣食なき生命なき何年經とも成長せざる如き宗教は宗教自己の生命も永存すること能はざるなり。願くば生命のある宗教を傳播せん。

宗祖が導師を指南と爲る理由

選擇集問曰華嚴天臺等諸師各造淨土竟疏、何故不依彼等師、唯用善導大師乎、答曰、乃至、善導和尙是三昧發得人也、何不用之、答曰善導是師、爰知善導和尙者行發三昧力堪師位解行非凡將是曉。

宗祖の立宗義導師を用うることは、導師只釋尊の聖經を祖述するのみに非ず三昧發得して經の眞髓生命を稟承す。教權文字の形骸を以て證とせず。全く釋迦の眞髓生命を證して章疏を造る故に偏用導師祖述す。

宗祖亦只導師の宗義只一心專念の言說文字を解信するに止まらず、實修の功果とし自ら發得三味、淨土宗の眞生命を得たり。

宗祖已に淨土教に生命未だ發得せざる祖師を取らず。若し宗祖にして如斯活眼なく只宗教を教權文字の上に認めて眞の宗教を學問に在りと信ぜんか、竟に淨土宗は活ける宗教として生存すること能はず。現代の如く只死骸取置きの似假宗教と成了すべきのみ。願くば吾朋良宗祖二祖の源に立替て淨土宗を復活して靈に死せるの國民を救靈せんこと實に今日の急務なり。

宗祖入信と證入

竊案吾宗祖淨土門を開くの鍵を以て此國に來るや疑ふべからず。然れども閻浮應化

の身は人間の規則に準じて入信より漸次に進みて起行の過程を經歷せしや疑へず。宗祖が四十三一心專念の佛願故の故の語に非常な力を得て、之を信仰の生命として、從來の一切の餘行を捨てゝ專修念佛に決定したるが即ち入信の期である。是佛願の意義を深く解信した位。爾後專修の功積り行遂けて三味發得して證信に到るまでの歷史即ち內的生活には幾多の階級的に發達し玉ひしこと何ぞ疑はん。

然るに祖は親しく道俗に勸むるに入信當時の順彼佛願故の意義を以てす。內證の信仰生活の狀態を披瀝して信者に勸誘し玉はず。然れども御自身の信仰の內容の益々增長し充實し給ひたるは、秘密に附し語り玉はず。滅後三味發得記に錄して後昆に傳ふ。

其他內容の消息は道詠を以て窺ふ一端と爲る。

宗祖の宗教的生活の完全に成熟したる內容の充實したることは最圓滿なる人格に現はれ、又內證甚深なる、彌陀の慈悲に滿されたる、靈的の豐富なる、或は燈光なくして聖經を閲し、又は頭光の、、、、、、

南都北嶺の山徒の橫暴なる迫害にも敢て恐怖の色なく、罪無くして謫せらるゝも、敢て憾まざるのみか、還つて邊土に弘通することを得るは偏に是朝恩なりと喜色滿面に溢るゝと。實に人格の圓滿に成熟せる後昆の習ふべき所、宗祖の人格に於て窺ふことを得べし。

法と行との撰擇內容を洩し給へる道詠

あみだ佛と云ふより外は津の國の
難波のことも惡しかりぬべし

祖の立宗の根據

宗祖が宗旨建立の根據示前の他宗の祖師が開宗と根據の異なる處、譬へば傳教の臺

宗に於ける、弘法の言教に於ける、入唐して宗師に就いて傳法附法して其宗を傳ふ。宗祖は自ら一代の佛經及び唐土傳來の經典に依り、最勝の法にして最易の行を撰み、批判と撰擇とに廿五年間苦心の結果、善導の疏に一心專念文に依りて宗の生命爰に存することを悟り開宗の根據と爲す。

選擇標準

法——名號を選擇——名號。一、萬德總持。二、名體不離の故一切萬法の中に最勝たり。三、彌陀種子の故。

行——念佛を選定す。一、彌陀本願の故。二、父子合一の故に。三、萬機普益の故四、直辨の故に。五、至簡易行の故に。

初、法に就て、一、名體不離の故。二、萬德總持の故。三、彌陀種子の故。

玄義。萬善妙體即二名號六字一、名詮自性。二祖曰喩如下呼二人名一時思二其人體一號二佛名一思二佛體一

二、名號萬德總持故。集、初勝劣者、念佛の名號者萬德所歸也、然則彌陀一佛所有四智三身十力四無畏等、一切內證功德、相好光明說法利生等、一切外用功德、皆悉攝在二阿彌陀佛名號中一、故名號功德最爲勝也、餘行不レ然、各守二一隅一、是以爲レ劣、

三、元照云。四字名號凡下常聞有二何勝能一、超過衆善、答、佛身非相、果德深高、不レ立二嘉名一、莫レ彰二妙體一、

十方三世皆有異名、況我彌陀以レ名攝レ物、是以、耳聞口誦、無邊聖德攬入二識心一、永爲二佛種一、頓除三億劫重罪一、獲證無上菩提。

行、念佛選擇。

一、彌陀本願故。二、父子相合の故。三、直辨故。四、王三昧故、萬機普益故。五易行の故。

名號は法に約し念佛は行に約す。

一、彌陀本願故。一心專念乃至順被佛願故。

二、光明遍照、念佛衆生攝取不捨。

三、一心不亂執持名號、大善根故。

四、元照云、生佛一體感應道交、記衆生諸佛同一覺源、諸佛心內衆生新々造業、衆生心內諸佛念々證眞、全彌是生、全生是佛、故云一體。

五、易行故、集云、難易義者、念佛易修、諸行難修、是故往生讚問曰、何故不令作觀直遣專稱名號者、有何意乎、答曰、乃由衆生障重境細、心麁識颺神飛觀難成就也、是以大聖悲憐、直勸專稱名字、正由稱名易故、相續即生。

要集。今勸念佛、非是遮餘種々妙行、只是男女貴賤、不簡行住坐臥、不論時處諸緣修之不難、乃至臨終願求往生、得其便宜、不如念佛。

（以下斷絕）

昭和二年八月廿八日印刷
同　三十日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢（郵稅共）
年拾貳冊　貳圓（郵稅共）

編輯兼發行人　山崎辨成

東京市小石川區茗荷谷町九八
印刷人　小林七太郎
電話小石川一四九五

東京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番